〔和漢三才圖會四十六介甲〕璃瑁

按璃瑁甲飾文匣香盒、爲櫛笄簪子等、黑紫色映日見之、有白赤黃標文、艶美可愛、然脆易折損、難繼補也、近頃工人、繼櫛齒折者、聊不見其痕、但炙温接之耳、

〔歷世女裝考二〕璃瑁を斑なしに作る起立

寺島良安翁、此書〔和漢三才圖會〕を作りし頃、今の如くべつかふの透所のみ斷截接合事あらば、右の文の下へ其事をいふべきにいはざるは、折たるをつぐ事のみにて、今の職術はさらざりしとみへたり、然ればきりよせてつぐ事は、何れの比及にやあらん、其源を尋ぬべしと、正德今より百三十年ばかりまへ以來の書どもを、俗にいふちごくさがしに尋ねけるに、ありげにおもひしにはなくて、おもひの外なる俗書にて一證をえたり、〔略〕中舊友玳瑁樓照義老人のもとに至りて、〔略〕中接合事の起立おぼへありやと尋しに、翁謂やう、我家は今に三代玳瑁の職を業とす、父は元文元年の生れにて、享和十年酉のとし、七十七にて身まかりぬ、父がはなしにきゝしは、享保の中比、長崎より江戸に來りし回國の六部、べつかふ職の者にゆかりありて、杖をとゞめしうち、病に臥し、日を經て全快したる禮謝にとて、べつかふをつぐ事ををしへしより、はじめて櫛笄のをれたるをつぐ事をさり、のちには弟子にもつたへ、世にひろまりしが、いまだ今の如く切拔つぐ事はさらざりしに、元文年中にいたり、職人の中に、よせてつぐものいできて、追々ひろまりしが、いまだ今のやうに鋏拐（カナバンカセ）をはめて繼事はさらざりしゆゑ、けふは誰が所にてつぐ日なりとて、そこにあつまり、かはるがはる鋏を握りて繼ぎ、たがひに助けあひけるに、仲間の内に一人、他の力を借ず、人よりは多く、細工をなす者ありし故、其術を尋ねしに、秘して教へず、然るにこの職人、賭に身をはたし、細工道具を箱に納、錠封して質入れし、京へ上りし後、絶て音信なきゆゑ、職人どもいひあはせ、かの質物をうけ出し、箱をひらきて、はじめて道具の便利なるをさりけると、父が聞つたへしとてかたれり、